

「迷惑を恐れ過ぎる日本」とセクシュアル・マイノリティー

黄 琴薇 (台湾)

最近、日本人の友人と自殺について話した。何か良い自殺名所が無いかと聞いたところ、ハワイのキラウエアへの身投げを薦められ、「海外か、入国審査官に入国目的を聞かれたら自殺って答えるのかな」と返したら、「審査官困っちゃうよね」と言われた。そして、「審査官に迷惑を掛けないために頑張って生きるしかないな」が最終的な結論となった。

勿論、この遣り取りは完全に冗談だった。しかし、「死んでも人に迷惑を掛けない」という考えは、日本では実は強ち冗談ではない。

数多く存在する日本の自殺サイトをぼんやり眺めたことがある。様々な自殺方法が紹介され、それぞれ「苦痛」「手間」「見苦しさ」などのパラメーターが、10点満点の形で記されている。そして、その項目の1つに「迷惑」があることが、私には不思議だった。絶望に呑み込まれ、生の意志すら失ってしまった人間が自ら命を絶とうと意を決するに至った際でさえ、「他人への迷惑」を考慮するということである。それほどに、日本人は他人に迷惑を掛けることを恐れている、ということだろうか。

確かに、社会生活を営む上で、他人に迷惑が掛からないよう努力するのは、至極当然である。しかし、世界に目を向ければ、日本人の「迷惑を恐れる現象」は尋常でなく、それを不思議に思う外国人も少なくない。街に貼ってあるポイ捨て禁止のポスターには「みんなの迷惑」と書いてあるし、電車に乗ると、「他のお客様のご迷惑になりますので通話はお控えください」とのアナウンスが耳に入る。「迷惑」という言葉は恰も何かの呪文のように、聞き手に呪縛を掛け、怖じ気立たせ、瞬時に行動を止めさせる効果でもあるように思える。このように、迷惑を恐れるのは日本人の一大特色と言えよう。海外では、たとえ同じ儒教文化圏の中国や台湾でも、「迷惑となりますので〜ご遠慮ください」のような構文は滅多に耳にしないのではないだろうか。外から見れば、多くの日本人は実に「迷惑を恐れ過ぎる」のである。

迷惑を恐れることは必ずしも悪いことではない。迷惑を掛けたくないという心理が、日本を秩序整然な国にしたのもまた事実である。それは国際的に大いに称賛され、多くの観光客を引き寄せる一因にもなっている。日本に旅行に来る人達は、大抵街中の秩序の良さに賛嘆する。列に並ぶ時は決して割り込みしない。法律違反なわけでもないけど電車の中で騒いだり、飲食したりする人は少ない。「すみません」という言葉を頻繁に口に発する。たとえ東日本大震災のような大災害が起こった時でも我先にと争わず、秩序を守って避難する。日本のあちこちに充満している「思いやり」を、世界中の人々が感心しているのである。

——これらは「迷惑を恐れる」ことの「光」である。観光客達は「光」を「観」るだけで満足するかもしれないが、しかし、私は常に、「光」と表裏一体の「影」や「闇」につ

いても考えている。

ここで少し、ブックカバーの話をしよう。人は何故本にブックカバーを付けるのか。「勿論、本を守るために、だ」と誰かは答えるだろう。しかし私は日本に来て初めて、多くの日本人はもう1つの目的のためにブックカバーを付けていることに気付いた。自分が何を読んでいるか知られないために、だ。そういう人達は透明なプラスチックカバーではなく、中身が見えない紙カバーを使っているのだ。勿論、プライバシーの観点で知られたくないのであれば納得できるが、中には一部、「人に不快感を与えないために」本のタイトルや表紙を隠している人も存在するらしい。「自重派腐女子」の多くはそうであろう。

腐女子とは、要はBL作品（男性同性愛者の恋や性愛を描く作品）を好む女子のことであり、近年では認知されつつある。中でも「自重派」と呼ばれる人達が、「同性愛描写は人に不快感を与えるから自重すべきだ」と考え、電車内で小説や漫画を読んでも常にブックカバーを付けるなどして、タイトルを他人に知られないようにしているらしい。このような配慮は詰まる所、「迷惑を恐れる」心理に起因するものに他ならない。しかし、果たしてそこまでして、迷惑を恐れる必要はあるのだろうか。そもそも、何故同性愛描写は人に不快感を与えられるのだろうか。疑問は次々と浮かぶ。

同性愛者だけでなく、セクシュアル・マイノリティーと呼ばれる人達は、日本では未だ平等とは程遠い扱いを受けている。同性愛描写が不快になる原因は、日本社会は少数派である同性愛者を差別していることにある——否、差別と言うのは些か語弊がある。「少数派は無視され、存在しないものとされている」ということこそが、日本社会の問題の根源であると思われる。

「迷惑を恐れる」という現象についてももう少し考えると自ずと分かるはず——日本人は決して、誰への迷惑も恐れているわけではないのだ。でなければ、イジメや差別などが存在するはずがない。「迷惑を恐れる」現象は、主に相手が上位者か特定・不特定多数の場合に観察される。相手が下位者や少数派の場合、多くの人は彼等に対する迷惑を意識しないのである。換言すれば、「迷惑を恐れる」ことに権力関係が存在するのであり、少数派は常にその犠牲になるのである。それどころか、少数派が何かを主張する時に、「それは迷惑だ」と批判されることも多々ある。

2013年3月、レズビアンカップル・東小雪と増原裕子が東京ディズニーリゾートで同性間の結婚式を挙げ、国内外で話題となった。しかし当初、「同性でも結婚式ができるか」という2人の問い合わせに対し、担当者は「異性に見える格好だったら問題ない」と答えたいらしい。その理由も、やはり「一般客への影響を考えると…」だった。つまり、ディズニーは同性愛者を差別していたわけではなく、「他人への迷惑」を恐れていたのだった。当事者から見れば、「ありのままの姿でいればそれだけで迷惑になる」ということになる。「少数派である同性愛者は常軌を逸する存在だから、多数派である異性愛者のやり方に順応しなければならない」というニュアンスも帯びているように感じられる。

私もレズビアン当事者である。日本に来てから、幾度かレズビアンの集まりに参加した。

中には非常に印象深い出来事があった。参加者募集の記事に、こんな注意書きがあったのだ。「会場は普通のレストランなので、一般客も多いと思われます。同性愛者はあくまでも少数派であることを自覚し、雑談などは節度を守ってください」。「節度を守る」とは、音量を下げるなどして、同性愛者の集まりであることを気付かれないようにすることなのだろう。これも他人への迷惑を避けるための措置であるが、もし単に「大声で喋るのは迷惑」という理由で節度を守るのであれば、「少数派であることを自覚し」という文言は不要である。つまりこれは、多数派への迷惑を恐れるが故に、少数派は存在を気付かれないように自覚・自粛するのである。「周囲からの差別」ではなく、「コミュニティ内の自発的自粛」なのだから、尚更質が悪い。私の出身国である台湾では、同性愛者に対する外からの差別はあっても、このようなコミュニティ内の自粛は考えられない。日本ほど迷惑を恐れていないし、自分達を「迷惑になる存在」とも思っていないからであろう。

そのような違いは、もう1つの事例からも観察される。2014年6月、青森在住のレズビアンカップルが役所に婚姻届を提出し、役所は憲法を援引し、受理せず、2人の求めに応じ不受理証明書を発行した。この行動について、ネット上では様々な差別的言論も見られるが、「不受理になると分かっているのに、こんなパフォーマンスは役所の人に迷惑だ」「養子縁組で家庭を作れば良い、わざとこんな行動を起こすのは社会に迷惑だ」との批判が特に気になる。結局「他人への迷惑」が着眼点である。偶然にも、同年8月、台湾・台北でも28組の同性カップルが役所に集まり、一斉に婚姻届を提出したという行動があった。受理されないと知っての行動であるという点は日本と変わらないが、この行動を「迷惑」の観点で捉える批判はほぼ見当たらなかった。

人権と平等の価値を信じ、それを望む人間は、差別撤廃を目的とする社会的な行動（敢えて「社会運動」と呼ぼう）には反対しないだろう。しかし、社会運動のあり方について、少なくとも二通りの考え方があり得る。1つは、社会運動が「迷惑」を伴うのは当然であるという考え方。「迷惑」になることで初めて自らの存在を主張し、権利促進を求めることができる。迷惑にならない限り、関係のない多数派にとってはいつまで経っても対岸の火事であり、関心を持たないのである。もう1つは、少数派であっても権利を主張する際に迷惑をかけてはいけない、という考え方。社会運動が迷惑になると支持を得られないし、反発を起こしてしまえば逆に目的は達成しにくくなる。どちらも一理あるが、私の観察では、台湾では前者、日本では後者のほうが多いようである。

日本の「迷惑を恐れる」風土は、国民達の自制心を最大限に引き出し、思いやりのある社会を築き上げた。しかし一方、「迷惑を恐れる」という心理の下で、少数派は声高に平等の権利を主張することを許されず、時には「自粛」を、また時には自己の存在を隠蔽することを強いられる。視点はやや違うが、「若者は迷惑を恐れるあまりに、新しいことにチャレンジする勇気を失っている」という現象が指摘され、日本人の中でも問題視されつつあるらしい。このように、「光」と「影」を併せ持つ「迷惑を恐れる現象」であるが、如何にそのメリットを保ちつつも、その害を取り除くかは、今後の日本にとって大きな課

題となるのであろう。

あなたも、日本人は「迷惑を恐れ過ぎ」にいると思うのだろうか。そこから脱却するために、まずは透明なブックカバーを使うことから始めてはいかが？

